

東南アジア史学会会報 No. 1

昭和 41 年 12 月 12 日

寒さもいよいよ厳しくなつてしまひりましたが皆様には御健祥のことと存じます。

さて昨年 5 月以来 5 回にわたつて「東南アジア史研究会会報」をお届けしてまいりましたが、去る 11 月 11 日の研究集会で新しく東南アジア史学会が設立されましたので、これまでの研究会会報は No. 5 をもつて終りとし、新しく「東南アジア史学会会報」を発行することになりました。そこで今回は従来の研究会の活動報告と、新しく出発した東南アジア史学会のニュースとを合せお知らせ致します。

昭和 41 年度第 2 期東南アジア史研究会活動報告

- | | | |
|-------|-----------|--|
| 第 1 回 | 9 月 12 日 | 第 2 期の活動についての話し合い |
| 第 2 回 | 9 月 30 日 | 岸 幸一：Cady, Chap. 25 |
| 第 3 回 | 10 月 14 日 | 池端 雪浦：フィリピン史研究 |
| | 11 月 11 日 | 東南アジア史研究集会 |
| 第 4 回 | 11 月 25 日 | 白石 晶子：東南アジア華僑史研究史 |
| 第 5 回 | 12 月 9 日 | 鈴木恒之，広島敦隆：戦後の日本におけるイン
(以下予定) |
| | | ドネシア史研究 |
| 第 6 回 | 1 月 13 日 | 生田 滋：ポルトガル・オランダ史料を通じ
てみたマラヤ・インドネシア史 |
| 第 7 回 | 1 月 27 日 | 河部 利夫：タイ史研究史 |
| 第 8 回 | 2 月 10 日 | 沢株 正始 他：インドシナ半島史の研究史 |
| 第 9 回 | 2 月 24 日 | 太田 常蔵：ビルマ史研究史 |

「東南アジア史研究集会」報告

去る11月11日、本郷学士会館において後記の通り多数の皆様の御参加をいただいて、本年度第2回目の研究集会をもちました。プログラムは以下の通りでした。

午後2時開会 司会 市川健二郎氏
座長 箭内 健次氏

「東南アジア史学会」設立の提案

発起人代表の経過報告 白鳥芳郎氏

会則の審議

会則の決定承認

役員の選出

休憩

研究発表

「東南アジア史の時代区分 — タイ史を中心として—」発表 河部利夫氏

司会 伊東隆夫氏

「ジャバにおける大土地所有について」発表 田中則雄氏

司会 中村孝志氏

午後六時閉会

又この後懇親会を開き、岩生成一氏、竹田龍児氏、西村朝日太郎氏らから海外における研究活動や国際学会のニュースなどを伺いました。

当日の研究発表の要旨は次の通りです。

東南アジア史の時代区分

—タイ史を中心として—

河 部 利 一

利 一 河 部

タイ史の時代区分は、民族史の中からでなく、より広く Schicksal-gemeinschaftlich (Benda)な東南アジア世界の枠の中で考究されるべきである。その前提として、東南アの統一的実体の認識と変動過程の体系的把握が必要である。統一性は東南ア基層文化各要素の普遍性の指摘となる (Coedès, Winstedt, Krom, Hall 等)。変動屈折には各種の Foreign Impact (Indian, Chinese, Western 等) に着目したい。そして又ここに東南ア史の時代区分が世界史の枠の中で考究されもある。

タイ史は従来単純に Chronological な叙述にすぎなかつたが、1952年発足の国史編集委員会案 (1957) では、スコータイ・アユタヤ・バンコクの3王朝区分を立て、構造的に体系的把握を行わんとしている。即ち、(1)タイ族のインドシナ半島移住前後 (基盤社会・基層文化)、(2)スコータイ期～アユタヤ期第9世ボロムトライロカナート王 (15世紀末) (部落国家=アーナーチャツク及びインド・シナ両文化の影響による民族文化の形成)、(3)アユタヤ中期～バンコク朝第3世ナシ王 (19世紀中葉) (統一国家=プラテートの形成と西欧勢力下の社会変動) である。この後は未着手なるも、委員の 1 人ロン・サヤマノン教授 (チュラロンコーン大学) の概説書 (1963) により、(4)第4世モンクット王 (1851～68, 近代化の先駆) より立憲民主革命 (1932) を経て現在に至る過程、即ち西欧化から自主的近代化、主体的ナショナリズム創成の時期を推定することができよう。

ジャワにおける大土地所有について
（西ジャワの研究）

田 中 則 雄

ジャワにおける土地の占有形態は、中部ジャワでは共同体占有が強く、西部ジャワ、東部ジャワ、マスラ島では世襲的個人占有が支配的である。ここでは西部ジャワを中心として大土地所有の問題を扱いたい。西部ジャワの土地所有状況を Samiati Alis jahbana (1954), Ir H. tem Dam (1956), D.N. アイジット (1961) らの研究・調査によつてみると、Tjipamokolan, Chibodas の二つの村の場合、全戸数の 1% 以下或いは 1.5% ほどの大土地所有者 (5 ヘクタール以上) がそれぞれ村のないしは他の土地を所有している。このような大土地所有がどのようにして成立したかを歴史的に検討してみると、次の三点が考慮される。1. オランダのコーヒー強制栽培制度の影響 (a. 東インド会社の時代, b. 強制栽培廃止後, c. プランテーション導入後の三期にわたつて), 2. 村の自治機能が弱かつたこと (自治単位としての力、土地の管理権が弱く、土地靈に対する尊敬心がない), 3. 貨幣経済の浸透。この大土地所有を改革するため 1960 年、農地基本法が出されたが実施はまだまだの段階である。

東南アジア史学会会則

第一条 この会は東南アジア史学会と称する。

第二条 この会は東南アジア史研究の発展及び普及を図ることを目的とする。

第三条 この会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 機関誌の発行
2. 研究及び研究発表のための会合の開催
3. 会員総会の開催
4. その他必要な事業

第四条 この会は事務所を東京都文京区本郷七丁目三番一号、東京大学文学部東洋史学研究室(南方史研究室)におく。

第五条 1. 会員はこの会の目的に賛同し、所定の会費を納めた個人とする。

2. この会の発展に寄与し、総会において承認されたものを特別会員とする。

第六条 1. この会に次の役員をおく。

(1) 会長一名

(2) 委員若干名

2. 役員の任期は二年とし兼任をさまたげない。

3. 役員は会員総会において決定される。

付則1. この会の会則の変更は会員総会において行う。

尚会費は年額1,000円と決定されました。本会の一会計年度は11月1日から翌年の10月31日までとします。

会員登録料は1,000円と決定されました。

会員登録料は1,000円と決定されました。

会員登録料は1,000円と決定されました。

会員登録料は1,000円と決定されました。

会員登録料は1,000円と決定されました。

会員登録料は1,000円と決定されました。

会員登録料は1,000円と決定されました。

<本年度学会役員>

本年度の役員として、会長には発起人会推薦の山本達郎氏が満場一致で選ばれました。又委員には次の六氏が指名承認されました。池端雪浦氏、市川健二郎氏、白石晶子氏、白鳥芳郎氏、畠博満氏、森弘之氏。尚本年度の役員はとりあえず一年間の任期にしてほしいとの山本氏の要望があり承認されました。

東南アジア史学会の発足にあたって

山 本 達 郎

東南アジアの文化・歴史に関する研究者が集まって、こゝに東南アジア史学会が発足することになりましたことを皆様と共に心から御喜び申上げます。東南アジアの研究は日本の学会における新興の分野であり、いわば「後進地帯」でありましたが、最近では次第に研究者の数が増え、昨年以来三回にわたって研究集会を開きましたところ、各地方から多数の方がお集りになって研究発表と討論が活発に行われますと共に、全国的に研究者の組織を整えたいという要望が次々に出されましたので、東京在住の関係者の間で準備の話あいが進められて、本日発起人会が開かれ、次いで学会設立の総会が持たれることになったのであります。顧みますと、東南アジア史の研究会が定期的に開かれるようになったのは昭和17年の頃からでした。曾ては台北帝国大学をはじめとして各種の研究機関や団体が東南アジア研究に活発な動きをしていましたが、太平洋戦争の終結のうちに解体してしまいましたので、昭和17年以来、名称に変化はありながらも、現在まで24年にわたって続いてきた東南アジア史研究会が、今回の学会設立の御世話をすることになった次第であります。

こゝに成立しました東南アジア史学会は、規模はまだ大きくありませんが、全国学会として発足したものであり、日本全国の研究者を会員として迎えるばかりでなく、学会としての活動が各地に於て行われることを意図しております。さし当って学会事務をお引受けする場所として、東大文学部の東洋史学研究室（南方史研究室）が当ることになりましたが、将来は各方面の研究機関で順次に仕事を受持たれるようになることを期待いたします。役員の組織も段々に整備されるであります。

東南アジア史学会の名称については発起人会で種々検討をいたしましたが、こゝで史というのは最も広い意味で用いてありますので、歴史学的研究のみでなく、歴史的に形成された文化・社会・経済・政治等の諸領域を広く研究の対象とするものであります。東南アジアの史的研究には学問の諸分野の協力が特に重要であり、この協力関係の推進は旧来の歴史学に対して方法論上の変革を求める事にもなるものと思われます。

東南アジアの歴史・文化の様相が特に複雑であることは何人の目にも明かであります。この地方の基層文化に多くの種類があり、そこに中国・インド・イスラムの諸文化が強い影響を及ぼし、その後ポルトガル・スペイン・オランダ・イギリス・フランス・アメリカ、また日本の文化的・政治的・経済的影響が加わり、更に近年の新しい国家形成・民族主義の展開があるわけで、この複雑な東南アジア史の研究には数多くの人々の協力が必要であります。そのことは研究者の習得すべき言語の種類だけからみても明瞭であります。今回の学界の成立によって、研究者の間に密接な連絡が出来、全国的な分業と協力の関係が進められて、この新しい研究領域が、資料の蒐集の面でも研究活動の面でも最も効率よく展開して行くことを切望し、また期待しております。

事務局長　中　井　義　也　助　手　中　井　義　也
幹事會　中　井　義　也　幹　事　中　井　義　也
会員登録　中　井　義　也　幹　事　中　井　義　也
書記官　中　井　義　也　幹　事　中　井　義　也
会員登録　中　井　義　也　幹　事　中　井　義　也

<東南アジア史学会発起人会名簿> (敬称略)

石井 米雄	河部 利夫	築島 謙三	増田 与一
市川 健二郎	岸 幸一	長岡 新治郎	松本 信広
伊東 隆夫	北村 甫	中村 孝志	三根谷 徹
岩生 成一	桑田 六郎	西村 朝日太郎	宮本 延人
岩田 慶治	白鳥 芳郎	早島 鏡正	箭内 健次
太田 常蔵	杉本 直治郎	久村 因美	山本 達郎
大林 太良	竹田 龍児	藤沢 義美	久徳 久徳
荻原 弘明	竹村 龍二	藤原 利一郎	
河原 正博	田中 雄則	牧野 畿	

<研究集会出席者> (敬称略)

青木 保	東大大学院	小川 宏	東大大学院
安藤 清	東大研究生	岡田 二	上智大学生
伊生 善	慶應大	河原 宏	法政大
池端 雪	東大大学院	阿部 正利	東京外大
石沢 良	東大化研	辛喜 博	東大
市川 昭	東洋文庫	喜田 升	上智大
伊川 健二郎	東洋大學	小島 生	東大
東隆 夫	島大	幹正捷	上智大
岩成 一	法政大	河瑞始	東大
太常 藏	大	正河 正	上智
太徹 良	大阪外大	水昭敏	東大
大林 大	東大	水彦義	上智大
小川 博	早大大学院	小名子 正	天理大

白石晶子	お茶大	奈良毅	東京外大
白鳥芳郎	上智大	西村朝日太郎	早稲田大
未成道男	東大大学院	量博	東大大学院
鈴木恒之	東大学生	畠田幸子	東大大学院
田淵保雄	東京大西洋史	久村さと子	因名大
高崎美佐子	お茶大学生	姫野翠	東大大学院
高津橋保	アジ研	平野孝	オランダ大使館
竹田龍児	慶應大	広島敦隆	東大学生
多田芳雄	国会図書館	藤土知弘	上智大大学院
田中則雄	忍ヶ岡高校	藤沢義美	岩手大
築島謙三	東大東洋文化研	藤原利一郎	京都女子大
土屋健治	東大大学院	松本繁一	日本経済新聞
常見純一	沖縄興南学園	松本信広	慶應大
友杉孝	アジ研	松山納	東京外大
中島由美子	上智大学生	箭内健次	九大
長井信一	アジ研	山崎元一	東大大学院
長岡新治郎	外務省	山崎利一郎	東大東洋化研
中島慎二郎	京大大学院	山本達郎	東大東洋化研
仲田浩三	共立女子高	山名弘史	東大学生
中林伸浩	東大学生	横溝忠夫	上智大大学院
中村悠子	お茶大学生	和田博	慶應大
中村孝志	天理大		

東南アジア史学会へ奮って御参加下さい！

東南アジア研究の発展のため、東南アジア史学会では皆様の積極的な御参加をお待ちしております。御意見や御感想をどしどし事務所へお寄せ下さい。

フレッシュな会員を御紹介下さい。東南アジア史学会の振替口座は東京です。全国のどこの郵便局からでもこの口座にて簡単に払込みが出来ます。会費は年額千円です。是非正式の会員となつて下さるようお願い致します。

会員となることを御希望の方は御住所御氏名を事務所までお知らせ下さい。